

ユアンロンピン

袁隆平氏、逝く

レスター・ブラウン著『だが中国を養うのか?』が話題を呼んだのは、一九九〇年代の中頃であった。中国の工業化と都市化はめざましいが、これを支えるのは食糧である。食糧供給が工業化・都市化に追いつかなければ、世界の大混乱は避けられない。この警世の発言に人々は強いリアリティを感じさせられた。

しかし、その後の中国の食糧供給は急速な増加傾向を示し、ほどなくして中国は米の輸入国から輸出国へと転じた。中国の食糧増産は、この国の水稻研究のパイオニア袁隆平氏ユアンロンピン、氏の指導下に集った農業技術者集団により開発された高収量品種の普及・拡大を通じてであった。袁氏はこの五月二十二日に逝去、と報じられた。

米であれ小麦であれ食糧の品種改良とは、いくつかの優れた性質をもつ品種、単位面積当たり収量が高く、耐病性が強く、かつ人々の嗜好しこうによくあう品種相互の交配によってようやく手にできるものである。私どものよく知る「コシヒカリ」や「ひとめぼ

渡辺利夫わたなべとしお（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究所博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任。二〇一〇年十一月、退任。二〇一七年六月より現職。

れ」などは、日本の米の品種改良の事例である。

品種改良と一口にいうが、成功は容易ではない。先のみえない試行錯誤を無限に重ね、願いが天に通じるようにして叶えられる、ほとんど徳倖とくこうというべきものである。優れた性質をもつ品種の条件の数は一〇ほどである。一〇種類としても、優に一〇〇〇を超える数の品種を人工交配によって育成し、この中から最適と思われるものを選定する。土壌条件や気象条件の異なる各地に見合うものを選んでさらに選定を繰り返す。品種改良に要する労力と時間は、実に無限である。開発者には高い声望が与えられる。

日本による統治時代に磯永吉いそながよし、末永仁すえながにの両氏によって開発された台湾の改良品種「蓬萊米ほうらいまい」がそうであったように、袁氏が改良品種「南優2号」にたどり着くまでには粒々りゅうりゅう、辛苦しんくの十数年があつたといわれる。海南島に野生する在来種とフィリピンの国際稲研究所の品種との交配によって成功した改良品種の創生によって、幸運にも中国は「中国を養うことができた」のである。